

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2007/3 第40号

かんたん 邯鄲夢の枕

日本ホテルの会理事 荻野 昭

昨年の12月8日午後、ハシボソガラスが3羽栗畑に舞い降り、そのうちの1羽が、高さ1m弱で続く茶の木の一隅に突入したと思ったら、すぐにその際に下り、足で掴んだ何かをつつき始めたのです。周りを警戒しながら7、8回の動作です。2階の目撃位置から10mの距離です。ガラスが移動したのでその場所に行って残してあった物を見ると、何とオオカマキリの卵囊の一部で通常の4分の1の大きさです。仔細に見ると卵囊の中の卵は1個もなく、卵とスポンジ状の卵囊の大半が食べられたことは明らかです。このガラスはカマキリの卵が食べられることを、どのようにして学んだのでしょうか。生来の興味深さからでしょうか、それとも産卵中の成虫を補食した経験があったからでしょうか。

鳴く虫の飼育、保存を目的とする愛好者の集まり「日本鳴く虫保存会」(1967年・会員160名)なるユニークな団体があって、探虫

会、虫の音を聞く会、放虫や学校等への無料提供等を行っています。またホテル部会では地元自治体(小平市)へ、ヘイケボタル成虫を多数提供してホテル見学会を実施しています。1999年からはカンタン、マツムシ、スズムシの音を競うコンクールを始め、私も審査員の一人です。籠の大きさ、虫の数に制限があり、暗い場所に置き90籠前後の中から美声で鳴く籠を選ぶのです。これらコンクールに登場する虫は、人の手で産卵、孵化させ育てたものです。

都市の拡大、郊外の開発などで、古来から親しまれた鳴く虫は減りつつあります。

そんな中1970年代から急激に分布を広げているコオロギの仲間“アオマツムシ”は甲高い声を合わせて鳴くので騒音視され、愛好家を嘆かせているのです。

アオマツムシは1898年、東京市内赤坂、榎坂下のエノキの樹上で鳴くのを聞き留められ、1915年に成虫が捕らえられ、アオマツムシと命名されたのです。中国南部(南京市)

での生息が確認されており、何らかの形で侵入した帰化昆虫として有名です。

1915年以降急に繁殖し、東京市内の各所で、その後郊外にまで広がっていったが、戦災にあって焼野原になり、桜の木と共に全滅に瀕したようです。東京以外では1940年代茨城、神奈川、石川、大阪、山口、長崎などに姿を現していましたが、1960年代まで東京都内ではその声を聞くことはありませんでした。1963年、日野市の多摩動物公園の梅林で鳴き声と姿が確認されました。この前後埼玉県のパウゼ市、川越市(1950年)、東京都瑞穂町(1968年)の記録があります。そして郊外に生き残っていたもの等が分布を広げ(庭木などの苗木の移動も含め)1970年代には東京都心部で、アオマツムシは完全に復活しました。1890年代に侵入したと考えられて約100年、1986年には1都2府25県に進出し、首都圏、中京地区、京阪神地域に集中分布している。最近の知見では岩手県盛岡市が北限とのことです。

アオマツムシの生態は、年1回の発生で卵越冬、孵化は5月中旬～6月中旬。幼虫期は8齢で80～90日。成虫は8月中旬から10月下旬まで鳴き声が聞かれ、9月上中旬が最盛期で、日没後3～4時間活発にさえずり鳴き(リュウ・リュウまたはチリー・チリー)をし、9月中旬、夜の温度が低下すると昼間に鳴くようになり(リーリー・チリーリーリー)の誘い鳴きを交えるようになります。

増殖した要因は以下のことが考えられています。

- ・ 幼虫と成虫の生活圏が在来のコオロギ類が生息していない樹上である。
- ・ 体色の緑が葉の色と同じで、葉裏に隠れ

る習性もあって天敵に補食されにくいこと。

- ・ 植樹は街路、庭園樹、雑木と多い(中でもサクラ、ウメ、モモ、カキ、カエデ等の落葉樹を好む)。

木の枝に産卵するので風雨や凍結の心配もなく、孵った幼虫は近くにある葉を食べて育つのです。草原のマツムシは後肢が長いのに比べ、アオマツムシは後肢が短く跳躍が苦手です。しかし翅を使って飛ぶことが出来、正の走光性から街灯、自動車、電車などの交通機関に付着しての分散移動も考えられます。

繁殖の旺盛力と関係しているか不明ですが、奇妙な交尾行動をすることが、1989年に明らかにされました。生物はどの個体も自身の遺伝子をより多く次の世代に残そうとします。既に交尾した雌が、再び他の雄と交尾することがあります。雄が精子を放出すると、精子貯蔵器官を満たしていた前の精子は、トコロテン式に押し出されてしまい、雄の生殖器に乗って抜き取られ、約90%が入れ換えられるとのことです。同様にカワトンボの交尾でも、前に交尾した雄の精子を掻き出して、その後に自身の精子を送り込む精子置換と呼ばれる行動が知られています。

冒頭のカマキリの卵を食べたカラスの目撃から、今世間から憎まれているカラスが、このアオマツムシを積極的に食べるようになり、騒音が解消し、エンマ、ツツレサセ、オカメコオロギ、カネタタキなど古来の虫の音が復活した夢を見たのです。邯鄲夢の枕なのでしょうか。尚カラスは、あのオペラの女王マリア・カラスに劣らぬ美声になったこともつけ加えておきます。

〈邯鄲夢の枕〉

蜀の国の若者が青雲の志を抱いて旅に出、宿坊で邯鄲の枕を借りて仮眠する。若者は天下に号する地位を得、一族と栄華を極めるところで夢から覚める。夢のはかなさを描いた物語。虫のカンタンとは無関係。昔の趙の都の地名で現在も邯鄲市として存在する。

【参考文献】

- 杉本武 他4名 拡がるアオマツムシの分布「インセクタリウム Vol.22」(1985)
大野正男 アオマツムシの分布調査に寄せて「インセクタリウム Vol.23」(1986)
小野知洋 アオマツムシの交尾行動と精子の入れ替え「インセクタリウム Vol.26」(1989)
岡崎常太郎 『わたしの昆虫誌』啓学出版(1971)

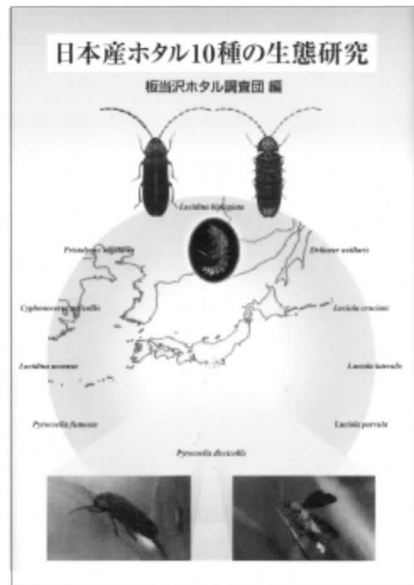
図・書・紹・介

「日本産ホタル10種の生態研究」

2006年11月25日 板当沢ホタル調査団 発行
A4版 ハードカバー

板当沢ホタル調査団は1998年9月に「東京ホタル会議」の内部組織として編成されましたが、1999年4月に独立した組織となり、東京都八王子市上恩方町の板当沢(いたあてざわ)で、ホタルを始めとする動植物の調査を行ってきました。団長は日本ホタルの会理事で東京ホタル会議議長でもある小西正泰氏で、事務局を日本ホタルの会理事でもある小俣軍平氏が務めています。

板当沢ホタル調査団では、これまで2000年から2005年にわたり6集の調査団報告書(I~VI)を発行しています。今回の「日本産ホタル10種の生態研究」の出版は、これまでの活動と成果の集大成であり、小俣氏の尽力に因るところが極めて大きかったと思われます。なお、本調査団は2007年4月を以て解散の予定です。



本書は以下の4部によって構成されています。

1 部 調査地と調査計画

板当沢は関東山地東南端の高尾山稜の板当山に水源をもつ小さな沢で、北浅川に注いでいます。北浅川と板当沢の分岐点の海拔は209mで、ここから林道が沢沿いに1.8km続き、終点の海拔が330mとゆったりした上り坂です。沢の植生は二次林であるクリ・コナラ群集で、陸生のホタルが6種類(ムネクリイロボタル、カタモンミナミボタル、ヒメボタル、クロマドボタル、オオオバボタル、オバボタル)も生息しています。

当初は、板当沢に生息するホタルの生態調査とそれに関わる自然環境の調査が目的でし

板当沢林道の自然環境の調査では、植生、水生生物、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、陸生貝類、土壌調査がなされています。ホタルについては、本州、四国、九州に生息する10種(ムネクリイロボタル、カタモンミナミボタル、ゲンジボタル、ハイケボタル、ヒメボタル、オオマドボタル、クロマドボタル、オオオバボタル、オバボタル、スジグロボタル)の生態が詳しく報告されており、それぞれの種類について、卵から幼虫、蛹、成虫、生息環境のカラー写真も付されています。陸生種の生態については、これまで詳細な報告がほとんどありませんでしたので、貴重な情報になると思われます。また、クロマドボタルの捕食行動や休眠明け幼虫の記録、室内飼育の記録なども報告されています。

3部 本州・四国・九州産マドボタル属の広域調査とその結果

本州から九州にかけて生息するマドボタルは、オオマドボタルとクロマドボタルの2種類です。オオマドボタルは近畿以西に、クロマドボタルは近畿以東に分布するとされていますが、その境界ははっきりしていません。これら幼虫の斑紋パターンには多くの変異がみられ、変異の型と分布のパターンが本州から四国、九州にかけて詳細に調査され、日本列島の地質構造と分布の対応が報告されています。また、ミトコンドリアDNAを用いた遺伝的な分化の調査も報告されていますが、オオマドボタルとクロマドボタルの分布の境界については、まだはっきりしていないようです。

4部

3部で挙げたそれぞれ10種のホタルについて、残された課題がメモ風にまとめられています。特に、オオマドボタルの特徴である雄成虫の前胸背板に出る赤の斑紋をもつ個体の分布は、今後、広域に調査する必要があるそうです。

本書籍は、書店では販売されておりません。本会事務局までお問い合わせ下さい(送料込みで3000円になります)。

日本ホタルの会副会長 鈴木浩文

■ 2005 年度会計報告

2005年度(2005年4月1日から2006年3月31日まで)の日本ホテルの会の収支は次表のとおりとなっています。本会計報告につきましては、2007年2月4日に日本ホテルの会理事小俣軍平さんと同荻野昭さんの会計監査を受け、2007年3月24日の理事会にて承認されました。

2005年度日本ホテルの会収支計算書 (2005年4月1日から2006年3月31日まで)

科 目	決 算 額
収入の部	
1. 会費収入	605,000
2. 寄付金	125,000
3. 参加費	5,000
4. その他収入	4,690
5. 受取利息収入	4
当期収入合計 (A)	739,694
前期繰越収支差額	1,451,535
収入合計 (B)	2,191,229
支出の部	
1. 通信費	229,386
2. 印刷費	103,057
3. 会場費等	36,910
4. 消耗品費等	19,570
5. 家賃	630,000
6. 手数料	14,220
当期支出合計 (C)	1,033,143
当期収支差額 (A-C)	-293,449
次期繰越収支差額 (B-C)	1,158,086

事務局からのお知らせ

理事会報告

2007年3月24日昭和女子大学において理事会を開催しました。理事会では、会則の改正、会計及び監査報告、会員証の取り扱い、2007年度事業計画について検討し、次のとおり決定しました。

(1) 会則の改正

日本ホテルの会会則第17条の規定に基づいて会則を改正し、入会について記載した第5条に第2項を追加し、退会の規定を設けました。

【改正会則(改正部分のみ抜粋)】

第5条 本会に入会を希望する者は、第4条(1)及び(2)については団体名、所在地、代表者(担当者)、(3)については氏名、住所、所属等を明記の上、別に定める会費を添えて、事務局あてに申し込むものとする。

2. 退会は、書面による申し出により退会することができる。申し出の日をもって退会となる。

(附則)

第3条 この会則は2007年4月1日より施行する。

(2) 会員証の取り扱いについて

会員証は、これまで会費請求後に会員の皆様にお配りしていましたが、2007年度からは会費の請求時期にかかわらず、年度当初に発行することとします。

(3) 2007年度事業計画について

2007年度は次のとおり主な事業を計画しています。

6月観察会 8月シンポジウム 10月ホテルサミット参加 3月談話会
(実施時期はすべて予定で、詳細が決まりましたら改めてご案内します)

■ 2006 年度会員証に係るお詫び

2006年は、事務局の移転などがあったため、通常より会費請求時期が遅くなり、会員証を発行することができませんでした、お詫びします。このことを契機としまして、会員証の発行時期、発行間隔について理事会で見直しを図り、前記のとおり毎年、年度当初とすることになりました。

■ 読者投稿の募集

日本ホタルの会では、ニュースレターへの、皆様の投稿をお待ちしています。ホタル、環境保全などに関する調査、研究報告、各地域での活動報告をはじめ、読者の皆様の体験、ホタルとの出会いなどを紹介する「私とホタル」のコーナーに掲載する記事を募集しています。

ご希望の方は、題名、氏名等と簡単な内容を記載して事務局あてお送り下さい。

ホタルのニュースレター（第40号） 2007年3月31日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

197-0011 東京都福生市福生 487

日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 042 - 530 - 2111

e-mail : inoue@nihon-hotaru.com

URL : <http://www.nihon-hotaru.com>



印刷 文明堂印刷株式会社

239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町 1-5

TEL : 046-841-0074 FAX : 046-841-0071